令和５年度　「スラブ・ユーラシア地域（旧ソ連・東欧）を中心とした総合的研究」に関わる「共同利用型」の個人による研究　研究報告書

令和　６年　４月　30 日現在

研究課題名	権力と帝政期ロシア・バレエの相関関係	
申請者	氏名	所属機関・職
	斎藤　慶子	大阪公立大学・特任講師

研究成果の概要

本研究は、権力とバレエの相関関係をあきらかにするための手がかりとして、皇族が帝政期ロシア・バレエの発展に及ぼした影響を検討することを目的としている。本研究では、北海道大学附属図書館に所蔵されている「ロマノフ家文書 Бумаги дома Романовых」シリーズを中心に閲覧することで、皇族の生活の中にバレエが占めていた地位を確認しようとした。

申請者はこれまでに１９世紀末のロシア・バレエにおいてジャポニスム作品が上演された事例を調査してきた。その結果が示唆するのは、皇族の動向とバレエのレパートリーの密接なつながりである。仮説の裏付けを強固なものとするために、まず皇族の日記にあたることから始めた。

皇帝ニコライ二世の日記（1894 年－1918 年）からうかがえるのは、劇場文化が皇帝の生活の無くてはならない一部を成していたことである。彼は通常で一週間に一回、多い時は連続して劇場に出かけ、それぞれの演目について自身の意見ももっていた。申請者が特に関心を抱いているジャポニスム作品で彼が実際に観劇したことが確認できたのは、1897 年に初演された『ミカドの娘』であった。この作品自体にはあまり良い印象は抱かなかったようだ。しかし巻末に収められている、彼が観劇したバレエ作品の長大なリストは、当時の帝政劇場がまさに皇帝のために娯楽を提供する場として機能していたことをあらためて確認させるものであった。

帝政時代の劇場運営に係る文化政策、劇場芸術の社会における受容、社会情勢とレパートリー政策の関連など、視野を広げた調査につなげることを目指している。いずれソ連時代の権力とバレエの相関関係との比較検討を行うことを考えている。

主な発表論文等（雑誌論文、学会発表、図書　等）※謝辞の有無について明記願います。

報告準備中。

当該研究活動をもとに採択された研究プロジェクト（応募中の研究プロジェクトを含む）

該当なし。

※枠を調整することは構いませんが、ページは追加しないでください。